第3回 世界小児集中治療医学会（モントリオール）に参加して（2）

国立小児病院　麻酔集中治療科
小児医療研究センター　病態生理研究室
中川　聡

第7回小児集中治療ワークショップ

第7回小児集中治療ワークショップは、モントリオールでの第3回世界小児集中治療医学会のポストコングレス・ミーティングとして2000年6月トロントで開催された。このワークショップは、日本人参加者を対象としたもので、トロント小児病院（The Hospital for Sick Children）の全面的な協力があってはじめて実現したものである。

ところで、小児集中治療ワークショップという研修会は、日本小児集中治療研究会の主催により1994年に初めて開催され、その後、毎年1回のペースで開催されている。これは、日本では欧米に比べて立ち遅れている小児集中治療の概念を、小児医療に従事する医師や看護スタッフに啓蒙する目的で始められたものである。私は、1994年の第1回からこのワークショップに参加させていただいている。会は年を重ねるごとに盛り上がり、我が国でも小児集中治療という概念が根付き始めていることを、毎年のワークショップを通して実感している。

小児集中治療ワークショップは、これまで東京と横浜で開催されてきたが、海外でも開催したいという声が以前からあった。西暦2000年は千年紀の年でもあり、また、我が国とも交流の深いトロント小児病院のDr. Barkerが第3回世界小児集中治療医学会を主宰することもあり、この記念すべき機会に小児集中治療ワークショップを海外で開催しようという案が数年前から練られ、ついにトロントの地で実現した。遠くトロントでの開催にもかかわらず、日本からの参加者は100人を超えた。

今回のワークショップの特徴は、トロント小児病院の集中治療部の二人の看護婦さんが中心となって企画立案したことであろう。Maria LaslopさんとJudy Kopelowさんが、その看護婦さんであるが、今回のワークショップの成功は、ひとえにこのお二人のおかげである。お二人とも、私がトロント小児病院で研修していた時にお世話になった看護婦さんである。英語も十分に話せない日本人医師（私のこと）が、患者さんのご家族につたない英語で病状を説明する時には、このお二人が、私がいわんとすることを察して、私より上手に（当然である）ご家族にお話ししてくれたことがたびたびあった。Laslopさんが、小児集中治療ワークショップのために、1998年（第5回）、1999年（第6回）と続けて来日し、国立小児病院をはじめとする日本の看護スタッフともすでに交流を深めていたことも、今回のトロントでのワークショップの成功の大きな要因である。また、もう一人の企画立案者であるKopelowさんには、今年の秋に東京で開催された第8回小児集中治療ワークショップにご出席いただき、Laslopさんに始まった日本とカナダの看護交流を今後も継続してゆく下地を作るためにご尽力いただいた。

さて、今回のワークショップは病院そのものを会場としていたが、その特徴を十分に活かしたものだった。日本からの参加者は、ベテランの医師から若い看護婦（士）まで多彩であったが、すべての人が参加してよかったと思わせるような多彩な企画が準備されていた。例えば、医師に対しては、呼吸生理学で世界的に著名なDr. Charlie Bryanの講義や「炭酸ガスが肺を保護する」という仮説で世界を驚かせているDr. Brian Kavanaghのお話が、参加者の知的好奇心を満足させた。一方、看護スタッフに対しては、気管内吸引、褥瘡予防、心肺蘇生といった基本手技から、高度医療である持続血液濾過や膜型人工肺による呼吸循環補助の装置（ECMO）の説明まで、幅広い話題が提供された。しかも、単なる一方通行の講義ではなく、参加者が実際に体験できる企画に仕上がっていたのは、企画者のみならず、今回のワークショップを支えたトロント小児病院集中治療部の看護スタッフの全面的な協力があったからこそである。

今回のワークショップで改めて感じたことは、カナダの看護婦（士）のそれぞれがプロ意識をもって仕事をしていること、そして、そのプロ意識をさらに伸ばす環境が整っていることである。例えば、持続血液濾過の回路の準備は非常に煩雑であり、またその運転にもかなり専門的な知識を要する。トロント小児病院では、その持続血液濾過の業務のほとんどを看護スタッフが担っているのである。医師がある患者さんに対して血液濾過を始めようと決断すると、担当の看護スタッフが回路を組み立て、カテーテルに接続し、運転を開始する。運転中も、流量や抗凝固薬の調節などの基本的なところは、看護スタッフが管理をしている。さらに、この治療法に必要な知識や技術を新人の医師や他の看護スタッフに教育するのも看護婦（士）の仕事なのである。このように、カナダでは、看護

中川　聡 / なかがわ・さとし
1984年　東北大学医学部卒業
同年〜1987年　沖縄県立中部病院臨床研修医
1987〜1988年　沖縄県立宮古病院小児科医員
1988〜1992年　国立小児病院麻酔科研修医、医員
この間1991年1〜3月　佐多フェローとして、カナダ国トロント小児病院へ留学
1993〜1994年　カナダ国トロント小児病院　小児集中治療部臨床フェロー
1995〜1996年　米国マサチューセッツ総合病院およびニューイングランド医療センター小児集中治療医学臨床フェロー
1996年　国立小児病院麻酔集中治療科医員
（小児医療研究センター病態生理研究室研究員を兼任）

職を自分の誇りとし、さらに高い目標を掲げる看護婦（士）たちが活躍している。さらに、このような頼もしい先輩看護婦（士）を見て、次の世代が育ってゆくのである。このような土壌が日本でも培われることを願ってやまない。

学会以外のこと

今回のカナダ旅行は、上述のように学術面（？）では充実していた。学会以外のほうはというと、結構、波乱万丈だった。まず、飛行機。現在、カナダでは2つの大手の航空会社の合併・統合が進んでいる。今回の旅行は、その2社統合の真っ最中だったため、航空機にまつわるトラブルには事欠かなかった。

トロント経由でモントリオール入りをしたのだが、トロントの入国審査の際に確認した荷物が、モントリオール到着時には紛失していた。結局、その荷物は見つかったのだが、モントリオールのホテルに届けられたのは、到着3日後であった。その間、毎日のように航空会社に電話をして「荷物はどうなっているのか」と問い合わせたが、先方は、そんなことは日常茶飯事だとばかり落ち着き払っている。後で知ったことだが、2社統合のあおりでモントリオールの空港は大混乱で、到着した荷物を順序よくさばけず、毎日、何百という荷物が持ち主に届けられず溜まっていたのだという。

第3回世界小児集中治療医学会が終了後、小児集中治療ワークショップに参加するためのモントリオールからトロントへの移動の際は、まず、天候のために飛行機の出発が数時間遅れた。これは、相手が天気だから仕方がない。遅れて真夜中に到着したトロント空港で、「今度こそ荷物のトラブルはないだろう」と思い荷物を待っていたが、待てど暮らせど荷物は出てこない。「モントリオールでの悪夢の再現か？」と思いつつ、「ひょっとすると別の便で荷物が到着するかもしれない」と考え、待つこと2時間、私と家内のスーツケースが荷物の回転台にあらわれた。この時点で午前2時を回っていた。ホテルに着いて、空腹のあまりルームサービスをオーダーし、床に就いた時には、時計の針はすでに午前5時を指し、外は明るくなっていた（数時間後にはワークショップが始まるというのに）。

もちろん、旅は悪いことばかりではない。モントリオールでは学会参加の合間に、バスで市内観光をしたり、旧市街を散策した。Notre-Dame Basilicaという聖堂がモントリオールの旧市街のランドマークである。このNotre-Dame Basilicaに面するPlace d'ArmesからPlace Jacques-Cartierを経てセント・ローレンス川の川辺に至る一帯を散策すると、美しい旧市街を満喫することができる。細い路地に入ると画廊が立ち並び、地元のアーティストの絵画や彫刻にふれることができる。また、モントリオールはグルメの街でもあり、ケベック（フレンチ・カナディアン）料理やモントリオール・スモークミートなどの地元の料理だけではなく、中華、イタリアンといった移民の人たちが作るエスニック料理も味わえる。今回の旅行では、旧市街のレストランで供されたアトランティック・サーモンが最も美味であった。

トロントでは、限られた時間の中で、かつて住んでいたころを思い出しながら、街を散策した。散策中に見つけたワインを今回の旅の記念に買った。先日、思い出したようにそのボトルのコルクを抜いた。学会の発表で多くの人たちの前で緊張したこと、昔一緒に研修した仲間たちと話ができたことなどを思い出しながらワインを味わった。

次回の世界小児集中治療医学会の開催地は、アルゼンチンのブエノスアイレスである。私は南米を訪れたことがないが、ブエノスアイレスは南米のパリと称される美しい街とのこと。タンゴでも有名。モントリオールとトロントで再会を果たした旧友たちと、さらに残念ながら今回の学会に参加できなかった友人たちとも、3年後のブエノスアイレスで会えることを祈って、この報告記を終えたい。